

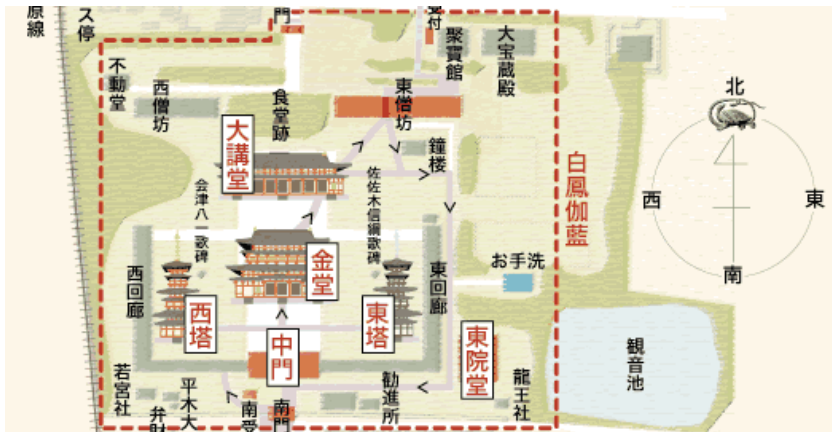
第8回 陽林会レポート「薬師寺参詣と写経の会」

平成 28 年 6 月 30 日

奈良西の京には、薬師寺や唐招提寺など白鳳期に建てられた魅力的な寺院があります。薬師寺は、興福寺とともに法相宗の大本山。南都七大寺の一つ。本尊は薬師如来。天武天皇の発願により持統天皇によって藤原京に建てられたものです。718年（養老2）平城京に移され、もとの薬師寺にならって新しく造営がすすめられました。東塔は、730年（天平2）に建てられたものと考えられています。できあがった当時の伽藍は、美しく堂々としたものでした。南大門を入ると中門で、中門と講堂をつないで回廊がめぐらされていました。回廊の内側に金堂と東西の両塔が建ち、回廊の外、講堂の北に食堂と食殿、その両翼に僧坊を配し、講堂との間左右に鐘楼と経蔵がありました。973年（天延元）食殿から火が出て、金堂・東西両塔以外のほとんどの堂舎が焼けてしまいました。年月をかけて



て再建がすすめられ、1528年（享禄元）、兵火にかかって金堂・講堂・西塔・中門・僧坊が焼失、東塔と東院堂だけが難をまぬがれました。1545年（天文14）仮金堂が建てられ、1852年（嘉永5）には仮講堂もできましたが、元の姿には戻ることはできませんでした。高田好胤師が管主に就任し遷化するまでの間、薬師寺伽藍の復興に「お



写経勸進」をしながら専念。以後、この勸進を継承し、1971年（昭和46）から復原工事がすすめられ、丹青の色も鮮やかに金堂と講堂は1976年（昭和51）、西塔は1981年（昭和56）、中門と回廊は1984年（昭和59）と、現代の匠により次々と再建され、白鳳時代様式の本格的な伽藍が蘇りました。創建時のままの東塔は、古色蒼然、しっとりと落ち着いたたたずまいですが、現在解体修復工事が進められています。東塔は、三重塔なのですが、各層に裳階（もこし）がつけられていて六重のように見え、リズムカルな美しさを持っています。相輪の上部の水煙は、空を舞う天女と童子を透彫りにした四枚の銅板からできている傑作、1300年の悠久の歴史を感じ



させるものです。

仏像は、金堂に安

置されている黒光りに輝く薬師三尊仏やギリシャ彫刻を思わせるその台座や大講堂の弥勒三尊仏は必見です。玄奘三蔵院伽藍。玄奘三蔵とは、あの西遊記で有名な三蔵法師。三蔵法師が目指した「瑜伽唯識（ゆがゆいしき）」の教えを受け継いでいる薬師寺は、玄奘塔内に1942年（昭和17）に南京にて日本軍が発見した三蔵のご



頂骨を、1981年（昭和56）に拝受。1991年（平成3）玄奘三蔵院伽藍を建立し、中央の玄奘塔に納めました。正面に掲げられた『不東』の額が印象的です。玄奘塔の北側には、三蔵の旅路を描いた平山郁夫画伯の秀作「大唐西域壁画」が安置されています。



もう一つの寺院が唐招提寺です。今回の旅では、バス内からの拝観となりましたが、招提寺は、日本の仏教界の腐敗を防ぐべく苦勞の末、中国からやってきた鑑真和上。和上は6度の挑戦のちに日本においでになりました。天平時代に入った日本には、授戒（戒律を授ける事）を授ける高僧が一人もいない状況で、僧の質の低下が大きな問題となり、正しい仏教の戒律を確立させる必要がありました。そこで、遣唐使とともに唐へ渡った興福寺の僧で美濃出身の榮叡（ようえい）と普照（ふしょう）が、本場・唐（中国）にて高僧の誉れ高い鑑真に、日本への訪問を懇願したのです。鑑真和上は、唐の時代の高僧。重鎮・大御所ですから、とてもじゃないけど、「来てください」なんて事は言えず、「せめて、そのお弟子さんの誰かに」。その話を、鑑真が弟子たちに振ってみたところ、誰一人として行きたがらない。この時代の航海はとても危険、ほとんど命がけだったのです。

誰も手を挙げない状況を見た鑑真「ならば、俺が行こう！」慌てた弟子たちは、鑑真の渡海に猛反対して引きとめたと言いますが、鑑真の決意は固い。すると、あれだけ手を挙げなかった弟子が、「鑑真さんが行きはるなら…」40名もの人数が同行を願い出たと言います。

しかし、その来日は困難を極めました。最初の試みは743年（天平十五年）寸前になって、怖くなった弟子の一人が、港の役人に訴えたため、鑑真は身柄を確保。2回目は、翌年の1月。この時は、無事、船に乗れて出港しましたが、暴風雨に遭い、やむなく帰国。この後、すぐに、3回目に挑戦しますが、鑑真の日本行きを惜しむ弟子の一人が、役人に密告し、なんと榮叡は捕えられてしまいます。脱獄した榮叡と落ち合った鑑真は、すぐさま4回目に挑戦。しかし、弟子の一人が役人に訴えて、渡航を阻止。その後、4年置いた748年（天平20年）に5回目の挑戦。今回、見事、出港に漕ぎつけたものの、またまた暴風雨に遭い、船ははるか彼方の海南島へ漂着。ここで、約1年を過ごした鑑真一行は、やがて中国本土へ戻りますが、その途中で榮叡が病死。帰らぬ人。やがて6回目の渡航となり、ようやく754年（天平勝宝5）、に屋久島に到着、鑑真は晴れて日本への渡航に成功し、奈良の朝廷への到着は、翌754年（天平勝宝6）2月4日であった。

何故、鑑真和上は5度に渡る船出に失敗し。また、失明されてもお来日されたのは、12年も後のことでありました。どうしてこんなにまでして日本においでになられたのでしょうか。山川老師は、こうお話になられました。「現成受用（げんじょうじゅよう）である」と。「つまり、仏様によって仕組まれた世界を、最大限のことをして成し遂げる（現成）。そこには、いいとか、悪いとかはない、一生懸命やり抜くことである。」と。私たちも、難しい生き方であるが、こころのどこかに留めておきたいものである。

唐の時代は、300年間（618年～至907年）その、629年～645年の16年間、「不東」の誓願をたてて玄奘三蔵はインドへ、玄奘が亡くなってから24年後、鑑真和上が生誕の後、742年～754年の12年間かけて「不西」の誓願をたてて、日本をめざした2人の高僧が、くしくも奈良西の京の近くの寺で顕彰されていることに不思議な縁を感じる。いずれの高僧も「現成受用」の天行であろう。



日本では「大化の改新」や「聖武天皇」、「東大寺大仏」が完成した時代です。